（撮影：中島健郎）

ナンダ・コート初登頂 80 周年記念事業報告会

ヒマラヤの聖峰、80 年目の再挑戦

― 山頂に眠る旗を探しに ―

20 世紀初め、ユーラシア大陸の天空に突き出したヒマラヤの高峰は日本人登山家にとって未知の世界であり、夢の山々でした。立教大学山岳部は 80 年前、そのヒマラヤの未踏峰「ナンダ・コート」（6861m）の初登頂に成功しましたが、この日本山岳史に残る偉業は、長く続いた戦禍に巻き込まれ、忘却されてしまいました。この、立教大学山岳部の足跡を探すため、再び山頂を目指した「ナンダ・コート再登頂プロジェクト」の報告会を開催します。

2018 年 1 月 12 日（金）

18:00～20:00 （開場 17:30）

定　員：200 名 （申込不要 先着順）

＜対象： 学生、教職員、一般＞

会　場： 池袋キャンパス 11 号館 A203 教室

主　催 ： ナンダ・コート初登頂 80 周年記念事業実行委員会

後　援 ： 立教大学 立教大学山友会 立教大学山岳部

企画・制作 毎日新聞社広告局 広告

初登頂から80年…

再びナンダ・コートへ挑む

標高5200㍍付近の急斜面を登る隊員たち＝中島健郎撮影

偵察に出た2人の隊員の間にのぞいたナンダ・コート南面＝門谷優撮影

最終キャンプ地に進む標高5800㍍付近でナンダ・コートの山頂を見る＝中島健郎撮影

20世紀の初め、ユーラシア大陸の天空に突き出したヒマラヤの高峰は日本人登山家にとって未知の世界であり、夢の山々だった。立教大学山岳部は80年前、そのヒマラヤの未踏峰「ナンダ・コート」（6861㍍）の初登頂に成功した。しかし、日本山岳史に残る偉業は、長く続いた戦渦に巻き込まれ、忘却された。立大山岳部の足跡を探し、再び山頂を目指すプロジェクトを2年間にわたって追いかけたドキュメンタリーが完成した。

偉業へ挑戦した登山隊の思い

■幻のフィルム「ナンダ・コット征服」

プロジェクト名は「ナンダ・コート初登頂80周年記念事業」。プロジェクトチームは昨年初め、1936（昭和11）年の初登頂の様子を記録したフィルムの探索に着手した。長く所在不明になっており、「幻のフィルム」とされている。

当時の立大山岳部の初登頂メンバーは、堀田弥一隊長（27）のほか山縣一雄（24）、湯浅巌（23）、浜野正男（22）の4人に、大阪毎日新聞社運動部記者の竹節作太（30）が隊員として加わった。竹節は、重さ10キロある撮影機「アイモ」を持って登頂し、一部始終を撮影した。

探し始めて半年後の昨夏、東京都千代田区の日本山岳会の倉庫に眠っていたフィルムを発見した。フィルム缶には「ヒマラヤの聖峰 ナンダ・コット征服」のタイトル。

発見したフィルムは当時、世界初とされた35ミリフィルムで撮影した28分間の山岳ドキュメンタリーだった。作品のナレーションを務めた男性の声は、登頂の瞬間を「勝った、勝った、おれたちは勝ったんだ」と興奮した名調子で伝えている。

さらに、プロジェクトチームは昨秋、長野県山ノ内町の竹節の生家で、初登頂の時に使用したアタックテントを発見した。記者である竹節は、登頂までの様子を撮影すると同時に日記を残していた。登頂前日（10月4日）の日記には、テントの真上に崩れ落ちそうな雪庇（せっぴ）がせり出しており、雪庇の下敷きになることなく一夜を過ごし、登頂できれば「テントを持ち帰る」と記されていた。堀田隊長は8年余り、ヒマラヤ遠征のために欧州の登山技術の研究と訓練などに費やしている。テントは、堀田たちの研究の成果を生かして生まれた純国産品だった。

■夢を追いかけた若者たちの時代

1936年、27歳の堀田は当時、ヒマラヤ登山史上で最年少の隊長だった。堀田たちは資金難に苦しむ。加えて時代状況が悪すぎた。同年2月には軍事クーデター「2・26事件」があり、世界は戦時色を強めていた。登頂の翌37年、日本は日中戦争になだれ込む。

堀田たちの嗅覚は鋭く、戦渦のはざまに残された一瞬の機会を突いてインド行を決行する。

冒険家の植村直己は生前、雑誌の対談で立大山岳部の快挙を「日本にとってもエベレストに登った以上に意味があります。あの時代にヒマラヤに遠征隊を出して行った、新しいものを開拓して行ったというのは本当に大きかったと思います」と語っている。

太平洋戦争末期の1944年7月、隊員の一人、湯浅は太平洋の激戦地マリアナ島で戦死した。湯浅はナンダ・コートで崩れ落ちる雪庇を踏み越えて生還し、山頂に立った。その並外れた体力と運動神経で他の隊員たちを驚かした男だった。

1936年10月、ナンダ・コートの稜線（りょうせん）を進む立大山岳部員＝竹節作太撮影

■最後のミッション「あの頂に再び」

今年9月17日、成田空港。隊長の大蔵喜福（66）をはじめ立教大学山岳部OBの堀達憲（64）、鈴木拓馬（24）の2人のほか山田祐士（38）、石井邦彦（37）、門谷優（34）、中島健郎（32）の精鋭7人の遠征隊員がインドに向かうため集結した。

80年前、堀田たちはナンダ・コートの山頂に立大校旗、日の丸、毎日新聞社旗をハンマーなどに結わえて埋めてきた。7人の遠征隊は山頂に埋められた旗を探し、再登頂の様子を撮影記録する任務を担う。

7人の遠征隊員の脳裏には、一抹の不安がよぎっていた。ナンダ・コートの位置するインド北部は中国国境に接し、中印紛争の火種を抱える。今年7月、中国共産党機関紙「環球時報」は、前月のインド軍越境をきっかけに「中国はインドと戦う準備ができている」と警告していた。

同時期、入山申請に対しインド側は、80年前と同じ北面ルートの登頂を認めず、遠征隊は南面ルートでの登攀（とうはん）に限られた。南面はインド、北面は中国国境に面する。

「太陽の日差しはありがたい」。岩場に腰かけ休息する隊員たち

今回、最年少の遠征隊員、鈴木は1万8000字に及ぶ「遠征日記」を付けている。日本をたって19日目の10月5日の日記を見ると、鈴木は最終キャンプ設営のため、偵察に出ている。

「5630㍍付近、山頂が見えた。想像以上にナンダ・コートの南面は大きい。傾斜も思ったより強く、真っ白な滑り台のようだ。ここまでも骨の折れる道のりだったが、最後にあんなところを登らなくてはいけないのか」

遠征隊隊長の大蔵の調べでは、ナンダ・コートは80年前の立大山岳部に始まって登頂成功は計3隊。南面ルートは1995年、英国隊の成功があるだけで、ほとんど未踏のルート状態だ。

山頂アタック隊は鈴木たちはじめ計4人。鈴木たちは10月6日朝、第2キャンプを出発し、最終（第3）キャンプに向かう。午前11時35分、標高5725㍍の地点に構えた最終キャンプに到着。夕刻、明日の準備を終えてテントの中で日記をつづる。

「とりあえず、明日がサミットプッシュである。アタックキャンプから見るナンダ・コート南壁は迫力がある。そして美しい」

テントの中でシュラフにくるまって、すでに寝息を立てているアタック隊の先輩を見て、若い鈴木は、興奮と不安で眠れず、まどろんでいた。

眠れぬ一夜を過ごした日記の最後には「若干、頭痛がする。明日の朝、高山病に悩まされずに気持ち良く起きられることを心の底から願っている。体を起こしてうつらうつらしていると、睡魔に襲われ、知らぬ間に朝になっていた」と記されている。

最終キャンプ地点から山頂まで約1100㍍。南壁の山頂直下は平均斜度約60度の氷壁。氷壁は約600㍍続く。最後で最大の難所だ。

アタック当日10月7日の日記。「午前零時、起床。マイナス13度。頭痛はほとんどない。月の光で南壁がうっすら見えている。遠征中で一番ワクワクしている」

1936年、立大山岳部の堀田たちとともに初登頂に成功した記者、竹節は山頂に挑む当日の心境を日記に「一昨夜、昨夜と続けて故国の父母の夢を見た。父は亡くなっているのに、何故夢に見るのか」と感じた不安を正直に記している。そして最後は意を決した一文を書き残す。

「いざゆ行かん。今日ぞ出発の日だ。天は晴れたり。いざ行かん」

鈴木の心境は、80年前の隊員と相似する。4人のアタック隊は月光の照らし出す南壁の頂に向け歩みだす。

「よし、行くぞ」

インドの最高峰「ナンダ・デビ」をバックに休息する遠征隊員たち＝門谷優撮影

夢の山、ナンダ・コート

立教大学山岳部OB
堀 達憲（64）

小学生のころ、父に連れられて上高地に行った。雄大な穂高にあこがれ、立教大学山岳部に入部。ナンダ・コート初登頂の事を知り誇らしかった。ヒマラヤへの夢は募った。しかし、卒業翌年に父が他界し家業を継ぐため山は封印した。

それから40数年。その山にチャレンジする機会を得た。初登頂時はベースキャンプまで50日を要している。現在と比べて情報、交通、装備、食料など当時の苦労は計り知れない。今回、登攀ルートこそ違うが光り輝く台形の頂上壁は悠久の時を経ても気高く美しい。隣峰のナンダ・デビ（祝福された女神）が初登頂時同様、静かに私たちを見守ってくれている。

ナンダ・コートに行って初登頂にかけた先人の熱意と粘り強さを目の当たりにした。先輩諸兄の築いた未知なるものへのロマンと挑戦する精神を立教大学山岳部の伝統としてこの先も引き継いで行く決意を新たにした。